

# 「任那復建」と日羅事件

朝鮮大学校教授 高 寛 敏

## はじめに

『日本書紀』（以下、書紀）欽明紀2年（541）夏4月条には、百濟聖明王が南加羅・卓淳・喙己吞の滅亡について言及しながら、「任那復建」を説く記事がある。この南加羅などの三国を「任那」と称したのは、「百濟本記」であるが、それは「任那」の原義を表わしており、『広開土王碑文』の「任那加羅」に相当する。「任那」とは、南加羅（金官加羅。現在の金海・釜山）を盟主とし、卓淳（現在の昌原）・喙己吞を網羅する政治的連盟体のことである。その南加羅は532年に、卓淳・喙己吞は541年までに、新羅によって統合され滅亡した<sup>(1)</sup>。一方、同じ欽明紀では

廿三年春正月、新羅打滅任那官家（分注。廿一年、任那滅焉。総言任那、別言加羅国・安羅国・斯二岐国・多羅国・卒麻国・古嵯国・子他国・散半下国・乞滄国・稔礼国、合十国）。

とあって、本文は「任那」滅亡を562年とし、分注所引「一本」は560年としている。この「任那」は原義のものではないから、それは書紀編者の改変なのである。分注「一本」とは、

「百濟本記」など、多くの個別的な原本記事を用いて、天皇紀年の一貫した編年体史書として一応完成した稿本であって、その「任那」は原本では「阿羅」（安羅）であった。「任那」を如耶諸国の総称のように用いたのは、この稿本の段階に始まる。稿本のこの用法を継承した完成者（付注者）は、新たに「加羅」滅亡年の知識をえて、それを「任那」として改めて本文記事を書いたのである。

書紀編者にとっても、「任那」は560年代で滅亡したのであるが、書紀にはその後も「任那」関係記事が瀕出する。その内容は二類別されるが、一は「任那復建」記事、二は「任那」がまだ健在で、天皇がそれを救援する一方、「任那」が「任那の調」を天皇に貢上したいという、不思議な記事である。その後者の記事は、642年に百濟が新羅から洛東江西岸一帯を奪取した事実について、それを天皇が百濟に「属賜」した（大化元年条）と歪曲したことを出発点とした、完成者の造作であるが、それについては既に詳論した。そこでここでは、主に前者の「任那復建」記事について検討することにした。

(1)この「はじめに」は、拙稿『『日本書紀』所引〈百濟本記〉に関する研究』（在日本朝鮮社会学者協会歴史部会編『高句麗・渤海と古代日本』雄山閣、1993年）と、「〈任那〉の滅亡と〈任那の調〉」（『東アジア研究』7、1994年）に基づいている。任那加羅の範囲

に関しては、4世紀の古式陶質土器段階で慶州地域、釜山・金海・昌原地域、馬山以西の西部慶南地域の間に、地域的特徴が表われるという指摘が参考になる。これについては安在皓・宋桂鉉「古式陶質土器に関する若干の考察」（『嶺南考古学』1、大邱、1986年）参照。

## 1. 「任那復建」記事の執筆者

関連記事は次のとおりである。

- (1)(a)(欽明32年春3月-571) 遣坂田耳子郎君、使於新羅、問任那滅由。
- (b)(同夏4月) 天皇寝疾不予。皇太子(敏達)向外不在。馭馬召到、引入臥内、執其手詔曰、朕疾甚。以後事属汝。々須打新羅、封建任那。更造夫婦、惟如旧日、死無恨之。
- (2)(敏達4年2月-575) 天皇、以新羅未建任那、詔皇子与大臣曰、莫懈於任那之事。
- (3)(敏達12年-583) 日羅関係記事。後述。
- (4)(敏達14年3月-585) 天皇思建任那、差坂田耳子王為使。属此之時、天皇与大連、卒患於瘡。故不果遣。詔橘豊日皇子(用明)曰、不可違背考天皇勅。可勤修乎任那之政也。
- (5)(a)(崇峻4年秋8月-591) 天皇詔群臣曰、朕思欲建任那。卿等何如。群臣奏言、可建任那官家、皆同陛下所詔。
- (b)(同冬11月) 差紀男麻呂宿祢・巨勢猿臣・大伴嚙連・葛城烏奈良臣、為大將軍。率氏々臣連、為裨將部隊、領二万余軍、出居筑紫。遣吉士金於新羅、遣吉士木蓮子於任那、問任那事。
- (c)(崇峻5年11月-592) 遣使於筑紫將軍所曰、依於内乱、莫愈外事。
- (d)(推古3年秋7月-595) 將軍等至自筑紫。一連の記事で注目されるのは、ここに出る「任那」が決して「任那加羅」の意ではないということである。(1)(a)で欽明23年に「問任那滅由」とあるが、この「任那」は欽明2年まで完全に滅亡した任那加羅ではなく、欽明23年条の「任那」を受けていることが明らかだからであ

る。それは(3)(後述)で「属我考天皇(欽明)之世、新羅滅内官家之國」とあることで、もっと明確になる。欽明代の「内官家」の滅亡とは欽明23年の「任那」に他ならないのである。

(1)以下の「任那復建」の「任那」が欽明23年条の「任那」を受けているとすると、それは原本には存在しなかった語ということになる。事実、(1)以後の対新羅関係で問題になったのは、新羅の「多々羅・須奈羅・和陀・発鬼、四邑」(敏達4年6月条)、あるいは新羅の「多々羅・素奈羅・弗知鬼・委陀・南迦羅・阿羅々、六城」(推古8年是歳条)をめぐる問題であって、原本はもちろん、稿本・完成本も、それらの地を「任那」とは決して一括しなかったのである<sup>(2)</sup>。(1)以後、新羅・倭間に「任那」問題は存在しなかったものであり、「任那復建」は稿本以下の造作なのである。そして、完成本がそれとは矛盾する「任那」生存記事を造作したことからして、「任那復建」は稿本の造作であることがわかるのである。(1)~(5)によると、「任那復建」は欽明から敏達、敏達から用明へと遺言され、崇峻にまで継承されている。推古以後に「任那復建」記事はみえないが、それは推古18年に「四邑」(六城)問題が解決し、新羅・倭間に良好な国家関係が結ばれたからなのである。つまり稿本は、欽明21年(欽明紀23年条分注)の「任那滅焉」と、推古18年までの「四邑」(六城)問題史料をにらみながら、「任那復建」記事を造作したのである。

しかし「任那復建」が造作であるということは、(1)~(5)に原本記事がひとつも含まれていない、ということの意味するのではない。(3)の日羅事件はそれをよく示している。(1)(a)も「問任那滅由」を除くと、対新羅関係の打開を計って、

(2) 拙稿「〈任那〉の滅亡と〈任那の調〉」(前掲書)

571年に初めて坂田耳子郎君が新羅に派遣された、という意味の原本記事としてよい。

(1)(b)・(2)・(4)は、「任那復建」に関する天皇の抽象的な詔で、それは造作文であることが明らかである。(5)は具体的な記事であるが、それにも疑問が多い。

(5)は「任那復建」の詔により、591年に紀男麻呂ら4人を大將軍とし、2万余の軍を筑紫に派遣したが、その軍は595年に帰還したとある。この後、602年(推古10)にも来目皇子を撃新羅將軍とし、筑紫に「二万五千人」の軍衆が派遣されたとある。このように、2万以上の軍勢を相ついで2度も筑紫に派遣したとあるのには、661年～663年の百済派遣軍総数2～3万を考えると、根本的に疑問が生ずる。兵数を割引いて考えても、相次ぐ九州派遣とは現実には考え難い。(5)(b)の4人の將軍名は全て崇峻即位前紀の物部守屋討伐軍中にみえるので<sup>(3)</sup>、やはりそれらの人名を借用して、「任那復建」軍とした、稿本の造作文とみるのが穏当であり、「撃新羅軍」とだけある来目皇子記事を基本的に事実と認めるべきであろう。この頃、「四邑」(六城)をめぐる新羅・倭間の対立は、最高潮に達していたと思われるのである。(5)(b)には、「遣吉士金於新羅、遣吉士木蓮子於任那」ともあるが、「吉士木蓮子」は敏達13年2月に新羅に派遣された人物で、その人名を借用したといえる。「吉士金」は敏達4年4月に新羅に派遣された「吉士金子」か、推古5年11月に新羅に派遣された「吉士磐金」からの借用で、脱字があるであろう。

このように、「任那復建」記事にはあまりみるべきものがないが、(3)の日羅記事はそうでは

ない。(3)の検討こそ、本稿の主要課題となる所以である。

## 2. 日羅事件の真相

敏達紀12年(583)条の日羅関係記事は7月・10月・是歳の三記事からなっているので、これを改めて(1)・(2)・(3)とし、(3)は長文なので、支障のない部分は省略しながら、項目を分けて掲示する。

- (1) (秋7月) 詔曰、属我先考天皇之世、新羅滅内官家之国(分注略)。先考天皇、謀復任那。不果而崩、不成其志。是以、朕当奉助神謀、復興任那。今在百济火葦北国造阿利斯登子達率日羅、賢而有勇。故朕欲与其人相計。乃遣紀国造押勝与吉備海部直羽嶋、喚於日羅。
- (2) (冬10月) 紀国造押勝等、還自百济。復命於朝曰、百济国主、奉惜日羅、不肯聽上。
- (3) (是歳)

(A)復遣吉備海部直羽嶋、召日羅於百济。(中略。羽嶋が日羅に隱密に会い、日羅の計によって厳しく督促した)。於是、百济国主、怖畏天朝、不敢違勅。奉遣以日羅・恩率・徳尔・余怒・奇奴知・参官・柁師徳率次干徳・水手等、若干人。

(B)日羅等行到吉備兎嶋屯倉。朝廷遣大伴糠手子連、而慰勞焉。復遣大夫等於難波館、使訪日羅。是時、日羅被甲乘馬、到門底下。乃進庁前。進退跪拜、歎恨而曰、於檢隈宮御寓天皇之世、我君大伴金村大連、奉為國家、使於海表、火葦北国造刑部鞞部阿利斯登之子、臣達率日羅、聞天皇召、恐畏來朝、乃解其甲、奉於天皇。乃營館於阿斗桑市、

(3)巨勢猿臣は崇峻即位前紀にはなく、そこでは巨勢臣比良夫が登場する。(5)でも巨勢臣比良夫とする写本があり、巨勢猿臣が正しいとしても、なぜこのような間

違いが生じたのか不明である。巨勢猿臣は欽明紀31年(510)秋7月是月条に「許勢臣猿」として出ているが、(5)はあるいはこれを参考にしたのかとも思われる。

使住日羅、供給隨欲。

(C)復遣阿倍日臣・物部贅子連・大伴糠手子連、而問国政於日羅。(中略。日羅が外征より3年の内政を説く)。然後、①多造船舶、每津列置、使觀客人、令生恐懼。尔乃、以能使使於百濟、召其国王。若不来者、召其太佐平・王子等来、即自然心生欽伏。後応問罪。又奏言、②百濟人謀言、有船三百。欲請筑紫。若其実請、宜陽賜予。然則百濟、欲新造国、必先以女人小子載船而至。国家、望於此時、壹伎・對馬、多置伏兵、候至而殺。莫翻被詐。每於要害之所、堅築壘塞矣。

(D)於是、恩率參官、臨罷国時(分注。旧本、以恩率為一人、以參官為一人也)、竊語德尔等言、計吾過筑紫許、汝等偷殺日羅者、吾具白王、当賜高爵。身及妻子、垂榮於後。德尔・余奴、皆聽許焉。參官等遂發途於血鹿。於是、日羅自桑市村、遷難波館、德尔等晝夜相計、將欲殺。時日羅身光、有如火焰。由是、德尔等恐而不殺。遂於十二月晦、候失光殺。日羅蘇生曰、此是我駝使奴等所為。非新羅也。言畢而死(分注。属是時、有新羅使。故云尔也)。

(E)天皇詔贅子大連・糠手子連、令収葬於小郡西畔丘前。以其妻子水手等、居于石川。於是、大伴糠手子連議曰、聚居一处、恐生其變。乃以妻子、居于石川百濟村、水手等居于石川大伴村。収縛德尔等、置於下百濟河田村。遣数大夫、推問其事。德尔等伏罪言、信。是恩率參官、教使為也。僕等人之下、不敢違矣。由是、下獄、復命於朝廷。乃遣使於葦北、悉召日羅眷属、賜德尔等、任情決罪。是時、葦北君等、受而皆殺、投弥壳嶋(分注。弥壳嶋、蓋姫嶋也)。以日羅移送於葦北。於後、海畔者言、恩率之船、被風没海。參官之船、漂泊津嶋、乃始得歸。

この話のあらすじは次のようなものである。

天皇が「任那復興」の計を謀るため、紀国造押勝と吉備海部直羽嶋を百濟に派遣したが、百濟王が承知しなかった。そこで10月に再び羽嶋を百濟に派遣して百濟王に迫ったので、百濟王もやむなく承諾した。大伴糠手子連が吉備兎嶋屯倉に日羅を迎え、難波館に達した。それから日羅は阿斗桑市館に遷ったが、その時天皇は阿部日臣・物部贅子連・大伴糠手子連を遣わして、日羅に「国政」を問わせた。日羅は外征よりまず三年の内治を説き、その後によべき二事について献策した。一は、船舶を多く作り、津ごとに列置したうえ、百濟王あるいは「太佐平・王子等」を召して自然に「欽伏」せしめること、二は、百濟人が筑紫を「請」うて、国を「新造」しようとしたなら、偽って承諾し、壹岐・對馬に伏兵を置いて百濟人を殺すことである。恩率參官は帰国に際し、德尔らに日羅暗殺を命じ、12月に德尔らは日羅を殺した。海畔者の言によると、恩率の船は風にあって没したが、參官の船は津嶋に漂泊し、そこから帰国したという。

この日羅の話は謎だらけである。日羅が「任那復興」のため召されたのでないことは既に明らかであるが、それを差し引いても不可解である。その最たるものは次の二点であろう。

一は、この事件の前後、即ち敏達6年に百濟は大別王に付して「律師・禪師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工、六人」を倭に派遣し、敏達13年には百濟から鹿深臣が弥勒石像を、佐伯連が仏像一軀をもたらしている。崇峻元年には法興寺建立のため、造寺技術者集団が百濟から倭に派遣され、倭からは善信尼が受戒の法を学びに百濟に渡っている。つまり百濟・倭間の伝統的な友好関係は一貫しており、日羅事件の前後も、倭は百濟から積極的に仏教文化を摂取しようとしていたし、百濟もそのための援助を惜

しなかったのである。日系百済官僚であったという日羅が、百済に敵対する理由はなく、また百済にとっても、宿敵の新羅を置いて、倭と敵対しながら筑紫に国を新造するという考えも余裕もなかったはずである。

二は、日羅自身に関することである。日羅はその後の仏教史において、聖徳太子に仰讃されたとも、弥勒菩薩の化身ともされたことである。延暦17年(917)撰とされる『聖徳太子伝暦』では、「賢者」・「聖人」である日羅が、檻樓をまとして難波に來た聖徳太子を識別し、地に跪いて合掌し、「敬礼救世観音大菩薩、伝東法栗散王云々」といったとあるが、これらは日羅が聖徳太子に先立つ、仏教的聖人であることを示唆している。書紀には採用されなかったが、「仏教縁起のうちに日羅のことが古くから語られていた」<sup>(4)</sup>という可能性をも推測させるのである。この点(D)で徳ルらが日羅を殺そうとした時、「時日羅身光、有如火焰。由是、徳ル等恐而不殺」とあって仏教的奇蹟を示しているのは注目される。日羅記事は大幅に改変された可能性があり、原本の日羅は僧侶ではなかったかと思われるのである。「日羅」という名自体が、それを裏づけるものといえよう。それが(B)で「日羅被甲乘馬」などと武人のように描写されているのは、日羅を「任那復興」に結びつけるための文飾といえるのではなからうか。

次のことも原本が大幅に改変されたということを示唆している。(D)で「恩率参官、臨罷国時」には「旧本、以恩率為一人、以参官為一人也」との分注が付されているが、(E)の末尾で明らかのように、それは「旧本」が正しく、「恩率参

官」を一名とするのは本文(付注者)の誤解である。この「旧本」とは、書紀では例外なく稿本のことである。一般的には付注者は「一本云」などとして、原本引用分注を付するところであるが、それがそうっていないのは、原本には「恩率」・「参官」がなく、それを登場させたのは稿本であろうことを推測させるのである。

それはおそらく確実なのである。なぜなら(C)以下は、皇極元年条史料を参考にして構文していることが明らかであるためである。

皇極元年(642)条によれば、百済から義慈王子翹岐(豊璋)を大使とし、義慈王弟忠勝や達率長福などが同行した使節団が来倭している。この一連の記事は、稿本による大幅な記事の配列変えが行われており、またその事実は642年のことではなく、643年のことである<sup>(5)</sup>。ところが、この一行の倭人のなかでおかしな風評がたったので、それを打ち消すために「大佐平智積」が「恩率軍善」と「参官」を同行して来倭した。智積は間もなく無事帰国したが、参官らの船は觸岸して破れた。そこで参官らは新たに船をえて再び出発したとある。

日羅記事と皇極元年条には見事な対応関係がみられるが、具体的には「召其太佐平・王子等」は「大佐平智積」・義慈王子「翹岐」を参考にしたもので、そうでなければ「太佐平・王子等」という表現は出るわけがないのである。「達率日羅」は「達率長福」を参考にしたもので、「恩率」と「参官」も同様である。(E)の最後、「恩率之船、被風没海、参官之船、漂泊津嶋、乃始得帰」も、皇極元年条で「参官」らの船が觸岸して破れたとあるのを参考にしたので

(4)三品彰英「聖徳太子の外交政策」(聖徳太子研究会編『聖徳太子論集』平楽寺書店、1971年)。なお日羅事件に関する専論として、日野昭「敏達紀と日羅の伝承」(平松令三先生古稀記念会編『日本の宗教と文化』

1989年)があるが、これらの疑問には答えていない。  
(5)拙稿「百済王子豊璋と倭国」『東アジア研究』、第10号、1995年

ある。「参官等遂発途於血鹿」とあるのは、血鹿が『肥前国風土記』松浦郡値嘉条に、「遣唐之使、從此停発」とあるとおり、遣唐使発船の地であって、その知識をもって書かれたものであろう。また(C)の「欲請筑紫」、「欲新造国」、「先以女史小女載船而至」も、翹岐倭人の風評、「弟王子・兒翹岐及其母妹女子四人、内佐平岐弥、有高名之人卅余、被於放嶋」を参考にし、かつ「嶋」を「筑紫」に見立てての造作文であろう。結局(C)の日羅の献策は、皇極元年条史料を参考にした造作文であって、(D)以下の「恩率」・「参官」も同様なのである。これらのことを考慮すると、日羅は原本では「達率」の官位をもつ百済官僚ではなく、百済で正式に仏教を学んだ最初の倭人であったと考えられるのである。

ではなぜ、稿本はこのような改変を敢て行ったかであるが、それについてはその前に徳尔らのことを検討する必要がある。

徳尔らは「恩率参官」の命により日羅を殺害したとあるが、「恩率参官」が架空のものであるから、その理由は別に考える必要がある。徳尔らは日羅記事で百済人のようにになっているが、「恩率参官」を除くとそうもいえなくなる。確実なのは、(D)の日羅の言葉「此是我駈使奴等」で、日羅の従者であるということである。(A)の「奉遣以日羅・恩率・徳尔・余奴・奇奴知・参官・柁師徳率次干徳、水手等、若干人」も、「恩率」・「参官」が後文を前提として書き込まれたのであるから、そのまま信を置き難い。「水手等」は(E)にも登場するが、これにも問題がある。(E)によると、日羅は「妻子」と「水手等」、それに徳尔らとともに難波に居たのであ

るが、それは難波からどこかへ船立ちするためであったのであろう。この「水手等」は後に石川大伴村に居かれたとあるので、原本のものであろうが、それは百済から来た水手とはいえない。百済の水手なら百済船に付いていたはずで、いつまでも日羅に同行するはずはない。あるいは日羅を百済に連れ戻すために待機していたとも考えられるが、日羅は初めから妻子を携行していることからすると倭に永住する考えであったと思われ、その可能性はない。この水手らは日羅が暗殺される直前に難波で会った倭人なのであって、(A)の「水手等」は、それを百済人に仕立てるための書き込みなのである。徳尔らも百済から来たのではなく、倭で新しく日羅に随従した倭人だったといえる。百済からの旧い従人なら、日羅を殺害するということもなかったであろう<sup>(6)</sup>。

稿本の構想はこうである。原本の日羅を「任那復興」に結びつけるために、日羅を武人とした。ところが日羅はなんらかの理由によって徳尔・余奴・奇奴知の三人によって殺害された。しかし「任那復興」のため天皇が召した日羅を、倭人が殺害したとあっては恰好がつかないので、百済人が殺害したとした。その理由づけとして日羅の献策を考え出したが、その際にヒントにしたのが皇極2年条史料であった。

それでは日羅はなぜ「任那復興」に結びつけられたかであるが、それにはまず原本の性格を追求する必要がある。以下に節を改めて、その点について述べることにする。

(6)「柁師徳率次干徳」は孤立人名で、「徳率」の官位をもつだけに、簡単に造作とはいえない。あるいは次干徳は日羅とともに来倭した百済使節であるかも知れないが、百済使節なら用が済み次第帰国したであろうか

ら、事件にはなんの関わりもなかった。それを「柁師」としたのは稿本で、そうしたのは「恩率」・「参官」を百済使節として造作したからであろう。

### 3. 日羅と大伴氏

日羅記事の原本については、日羅が(B)で「於  
 松隈宮御寓天皇（宣化）之世、我君大伴金村大  
 連、奉為国家、使於海表、火葦北国造刑部韃部  
 阿利斯登之子、臣達率日羅」とあって、日羅が  
 大伴金村大連を「我君」と呼んでいること、ま  
 た事件全般に大伴糠手子連が関与していること  
 により、既に大伴氏家記であることが指摘され  
 ている<sup>(7)</sup>。日羅の言では、宣化代に大伴金村  
 が派遣したのは日羅なのか、その父の阿リス登  
 なのか不明確ではあるが、その内容は宣化紀  
 2年（537）冬10月条の

(4)天皇、以新羅寇於任那、詔大伴金村大連、遣  
 其子磐与狭手彦、以助任那。是時、磐留筑紫、  
 執其国政、以備三韓。狭手彦往鎮任那、加救  
 百濟。

と一体のもので、(4)も大伴氏家記に基づくこと  
 される<sup>(8)</sup>。(4)は「三韓」など、完成者の付加し  
 た文字があり<sup>(9)</sup>、全体に誇張もあるが、「任那」  
 はまだ滅亡前の卓淳であると考え、卓淳の  
 危機に際して狭手彦が百濟に派遣されたことが  
 考えられる。阿リス登あるいは日羅は、この時  
 に狭手彦に同行して百濟へ入ったことになるの  
 である。(4)の解釈については、その時に日羅が  
 537年に百濟に行き、583年に帰国したとすると、  
 その百濟滞在期間が余りにも長期にわたること  
 になる。もちろん、日羅は百濟から妻子を伴っ  
 て来ているから、独身の青年時代に百濟に赴き、

そこで結婚したと考えられるので、それもあ  
 りえないことではないが、やはり不自然な感があ  
 る。そこで注目されるのは欽明紀23年（562）  
 8月条の、

(5)天皇遣大將軍大伴連狭手彦、領兵数万、伐于  
 高麗。狭手彦乃用百濟計、打破高麗。其王踰  
 墻而逃。狭手彦遂乘勝以入宮、盡得珍宝毗路・  
 七織帳・鉄屋還来（分注。旧本云、鉄屋在高麗  
 西高楼上。織帳張於高麗王内寝）。以七織帳、奉  
 献天皇。以甲二領・金飾刀二口・銅鍮鍾三口・  
 五色幡二竿・美女媛（分注。媛名也）并其從  
 女吾田子、送於蘇我稻目宿祢大臣。於是、大  
 臣遂納二女、以為妻、居輕曲殿（分注。鉄屋  
 在長安寺。是寺、不知在何国。一本云、十一年、  
 大伴狭手彦連、共百濟国、驅却高麗王陽香於比津  
 留都）。

である。この記事には「一本」および「旧本」  
 引用分注があるが、「一本」は原本の大伴氏家  
 記、「旧本」は稿本を指す。その年次は「一本」  
 の「十一年」（550）が正しく、稿本が潤色を加  
 えながら「廿三年」に遷したのである<sup>(10)</sup>。日  
 羅はこの時に百濟へ行った可能性が大きいと考  
 えられる。

つまり、こういうことであろう。537年に狭  
 手彦と阿リス登がまず百濟に行き、仏教に接し  
 た。阿リス登はその名からみて朝鮮移住民と考  
 えられ、特に仏教に傾倒したと思われる。そこ  
 で狭手彦の2度目の百濟訪問に際して、子の日  
 羅を同行させ、百濟で仏教を学ばせたのであ  
 る<sup>(11)</sup>。大伴氏も狭手彦の時から仏教に傾斜し

(7) 坂本太郎「纂記と日本書紀」『坂本太郎著作集』2、  
 岩波書店、1988年

(8) 鈴木靖民「宣化紀二年条の史料性」『塙保己一記念  
 論文集』温故学会、1971年

(9) 拙稿『『日本書紀』の〈三韓〉と〈任那〉』『朝鮮大  
 学校学報（日文版）』2、1996年刊行予定

(10) 拙稿『『日本書紀』雄略紀の対新羅関係記事』『東ア

ジア研究』、第6号、1994年

(11) 田村円澄『飛鳥・白鳳仏教論』（雄山閣、1975年、18  
 4ページ）は、「日羅は、阿リス登と韓婦とのあいだに  
 生まれたと考えられる」とするが、それでは大伴氏と  
 の絆が弱く、大伴氏が日羅帰国に努力した経緯が不明  
 瞭となる。

ていたとみてよい<sup>(12)</sup>。

それはともかく、ここに至って、日羅が「任那復興」に結びつけられた理由は、もはや明瞭である。日羅記事と(4)はともに大伴氏家記にあり、(B)の日羅の言葉は当然、(4)の「任那」記事と一体のものとなる。稿本が日羅を「任那復興」の立役者として改変したのも、あながち故なきことではなかったのである。

さて日羅記事は、天皇の敏達が日羅を召したとしているが、それは「任那復興」と結びつけた稿本の構想であって、原本のものとはいえない。敏達は、少なくとも仏教導入のために動く人物ではなかったことが、それを傍証する<sup>(13)</sup>。日羅は一貫して天皇の詔を受けて行動しているが、それは原本にたち返って再検討されなければならない。

日羅が大伴氏との絆の下に帰国したことは、原本の性格からも、また大伴糠手子が一貫して動いていることから疑問の余地はない、しかしそこには阿部氏や物部氏など、他の人物もみえていて、これは大伴氏が私的に日羅を招いたのではないことを物語っている。それはより上位の権力主体が背後にあったことを推測させるが、それが敏達でない以上、蘇我馬子を想定せざるをえない。蘇我氏と大伴氏の関係については、(5)に狭手彦が百済招来の種々の宝物を蘇我稲目に贈っていることに端的に表われている。つまり蘇我馬子が大伴糠手子の推挙により日羅

を召したのであるが、稿本はそれを「任那復建」と結びつけたのと関連し、馬子を敏達に置き換えたのである。以下には「詔」は「馬子」と読み換えて原本の内容にできるだけ迫ってみることにする。

(1)・(2)では、百済王が日羅の帰国を渋ったとあるが、そのような理由は存在しない。(1)・(2)の人名には疑問がなきにもあらずであるが、一応それを基に解釈してみると、次のようであろう。まず紀国造押勝と吉備海部直羽嶋が百済に派遣された時、初めて日羅の帰国が要請された。しかし急には日羅の準備が整わず、次の機会を待つことになったのである。2度目に羽嶋が来て、まず日羅の準備程度を確認し、そのうえで百済王の許可をえて帰国した。途中、吉備児嶋屯倉に大伴糠手子が迎え、難波に入った。(B)では、天皇が大夫らを難波に遣わし、その大夫らに日羅が自分の身分を明かすことになっているが、「復遣大夫等於難波館、使訪日羅」は「任那復建」に関連する造作文と考えられ、事実は日羅が馬子の許に行き、馬子に自分の身分を名乗ったのであろう。その後、日羅は阿斗桑市に逗留するが、その阿斗は推古紀18年10月条の「阿斗河辺館」の阿斗であり、それは『大和志』が指摘するように、大和国城下郡阿刀村里(現磯城郡田原本町坂手)のことである。阿斗は物部氏同族の阿刀氏の根拠地と考えられるが<sup>(14)</sup>、(C)の造作文、「復遣阿倍目連・物部贄子

(12) 日野昭「大伴狭手彦の伝承と仏教」(千葉乗隆博士還暦記念会編『日本の社会と宗教』同朋舎、1981年)は、狭手彦が百済からもち帰った鉄屋・銅鍮鐘三口・五色幡二竿が仏教用具と思われること、『新撰姓氏録』左京諸蕃に、和楽使主が欽明朝に「大伴佐弓比古」に随使した際、内外典や薬書・仏像一軀などをもち帰ったとしていること、後に狭手彦の娘が得度したことをあげ、「狭手彦自身も仏教の理解者であった」と指摘している。

(13) 敏達即位前紀に「天皇不信仏法」、また14年3月条

に「詔曰。灼然。宜断仏法」とあり、『元興寺縁起』乙巳年2月15日条に「他田天皇(敏達)欲破佛法」とあって、敏達は仏教の弾圧者とされている。これについて加藤謙吉「中央豪族の仏教受容とその史的意義」(川岸宏教編『論集日本仏教史』1、雄山閣、1989年)は、「蘇我氏と蘇我系の天皇・皇族の崇仏を基軸に据えて、仏教興隆史を描出」するための潤色で、実際は敏達は傍観者の立場を維持していたとする。いずれにしても、敏達が日羅を召したということは事実ではない。

(14) 阿斗の地名比定と阿刀氏については、亀井輝一郎



連・大伴糠手子連、而問国政於日羅」中の人名を生かすと、日羅を阿斗に迎えたのは物部贅子連で、(C)で難波に日羅を迎えたのが阿倍目連ということになるであろう。

(D)では「日羅自桑市村、遷難波館」とあるが、これには少し疑問がある。事件後の(E)で「以妻子水手等、居于石川」とあることからすると、日羅の妻子はもちろん、日羅もその前に石川に居住したと考えられるのであって、日羅一行は桑市より大伴氏の根拠地で、百済住民の多い石川に遷って落ち着いたと考えられるのである。稿本の立場からすると、それは不要なことであるから、削除したのではないだろうか。この難波上陸以後の過程で、日羅一行の従人として、徳ルらが配されたと考えられるであろう。

敏達12年は、大伴氏家記では日羅帰国年としていたと考えられるが、是歳条で一括された(3)は、おそらく数年間にわたることと考えられる。日羅は石川で布教に努めたのであろうが、大伴狭手彦女善徳・大伴狛夫人などが崇峻3年(590)に出家したのは、その影響によるものであろう。

その後、日羅は妻子とともに、徳ルらを従え、難波から水手をえて旅立とうとしたが、なぜか徳ルらの手にかかって、あえなく最後を遂げた。徳ルらが日羅を殺害したのは、単なる強盗行為のようなものであったのか、あるいは背後に、記すに憚る黒幕が存在したのか、その点につい

ては不明とする他ない。事件後の処理としては、糠手子が日羅の妻子を石川百済村に、「水手等」を石川大伴村に、徳ルらを下百済河田村に別置き、それぞれを推問した結果、徳ルらが犯人であることをつきとめた、ということである。

## おわりに

「任那復建」とは架空のものであって、それは稿本の造作によるのである。「任那復建」の立役者として登場し、百済に敵対的な言辞を吐いたと書紀に記された日羅は、実は百済で仏教を正式に学んだ最初の倭人であって、大伴氏との関係の下に帰国し、布教に努めたが、あえなく殺害された人物なのである。その殺害の理由は不明であるが、おそらくその当時、日羅は倭国最初の仏法殉教者と認識されていたと考えられる。日羅の記事が敏達12年条に一括され、13年条には倭国で初めて善信尼・禅蔵尼、恵善尼が出家したこと、また蘇我馬子が舍利をえて仏殿を修治したことにより、「仏法之初、自茲而作」と記されていることは、原本をみた書紀編者の意図的な配列とも想像される。

日羅の伝承は、石川や難波を中心に生き続け、仏家たちの間では倭国最初の仏教聖人として尊崇され続けたと推測される。後世の記録とて、一概に虚妄のことではなかったというべきなのである。

∟「大和川と物部氏」(『日本書紀研究』9、塙書房、1976年)参照。物部氏・阿刀氏のもう一つの根拠地である河内国渋川郡跡部郷近辺には飛鳥時代前期様式の瓦を出土した渋川廃寺(八尾市竜華町渋川)があり、山本昭「河内竜華寺と渋川寺」(藤沢一夫先生古稀記念論集刊行会編『古文化論叢』大阪、1983年)、加藤謙吉

注(13)論文は、渋川廃寺を阿刀氏建立とする。阿刀氏からは後に義淵・玄昉・善珠らの高僧が輩出し、空海の母も阿刀氏とされる。阿刀氏と仏教との関係は旧いと考えられるが、日羅との関係を想定できるかもしれない。

